

日本音楽教育学会 ニュースレタ - 第6号

Japan Academic Society for Music Education: News Letter No.6 2001 8/25

目 次

| | |
|--|----|
| 1. 会長・理事選挙結果報告 | 1 |
| 2. 平成13年度第2回常任理事会報告 | 4 |
| 3. ニュースレター第5号の修正と訂正 | 5 |
| 4. 第32回(沖縄)大会パネルディスカッションの企画について | 6 |
| 5. “ISME at Risk!” ---- <改革>の破局と危機からの脱出に向けて | 8 |
| 6. 新刊紹介(洋書) | 10 |
| 7. 会員住所・所属変更・新入会員(2000年度版No.3) | 12 |
| 8. 編集後期 | 14 |

1. 会員の皆さまへ 会長・理事選挙結果報告

平成13年7月8日



日本音楽教育学会会長 山本文茂

過日おこなわれました次期会長および理事の選挙に関しまして、「選挙管理委員会」委員長の茂木一衛氏

より以下のとおり選挙結果の報告を受けました。ここにその結果をお知らせいたします。

(PDF版では省略します)

2. 平成 13 年度第 2 回常任理事会報告

日時：平成 13 年 7 月 8 日(日)13:00～

場所：東京芸術大学音楽教育研究室

出席：山本・平井・村尾・宮野・岩井・佐野・杉江・坪能・遠山

欠席：大西・三好

議 題

【報告事項】

1. 会長選挙・理事選挙結果

7 月 7 日に開票された会長・理事の選挙結果が報告された。

会長については規約により全理事に文書で報告することとした。

2. その他

編集委員会報告（杉江委員）

次回編集委員会は 9 月 22 日（土）東京学芸大学で行うこととした。

学会誌第 31 - 2 号は編集委員会の都合により休刊の予定。

事典について

音楽之友社で担当されていた水島氏が退職され長塚氏に引き継がれた。

【協議事項】

1. 第 3 2 回大会について

研究発表

4 2 通の応募があった。企画担当理事によって 10 のグループに分けそれぞれの司会者が検討された。

日程・総会議題について

総会議題について検討された。

2. 新入会員・申し出退会者の承認

新入会員

2946 近藤久美 一宮女子短大

2947 丸山亨子 埼玉大院生

2948 清水耕治 広島大院生

2949 佐治亜矢子 大磯町立大磯中

2950 大塚恭子 加賀市立山代中

2951 稲毛光司 月館町立山手小

2952 岸 純一 山形教育委員会

2953 田井久美子 福岡教育大院生

2954 水野絵美 埼玉大院生

2955 稲益初美 福岡教育大院生

2956 加藤晃生 立教大院生

2957 森 完次 全日本電子楽器教育研究会

2958 高橋映子 山形大附属小

2959 山田育代 愛知教育大院生

2960 丹羽亜希子 愛知教育大院生

2961 浅野 隆 金城学院大

申し出退会者

1471 松田金夫 都立狛江高

617 佐藤治子

2666 赤澤典恵 岡山大院生

354 喜田 賦 奈良文化女子短大

2487 宮崎明子

1729 徳田真由美

1669 盛川里香

1390 松村麻利 松伏高

賛助会員

トヤマ楽器製造株式会社

現在 1680 名（平成 13 年 7 月 8 日）

3. その他

後援名義について

福山商工会議所主催「新福山箏サマースクール」の後援名義使用を依頼された。検討された結果、後援することとした。

日本学術会議第17期『年報』が9月発行されることになり日本音楽教育学会には100冊が割り当てられた。

後日、会員に購入案内を配布することとした。

大学評価委員会専門委員候補者の推薦について

大学評価・学位授与機構長：木村孟氏から依頼があり、当学会から4名を推薦した。

3. ニュースレター5号の修正と訂正

修正

ニュースレター5号に関して皆様に葉書でお知らせした16ページについて以下のように修正します。

編集委員会からのお知らせ

学会誌編集委員会 委員長 加藤富美子

平成13年4月より新しい編集委員会が発足し、今期の編集委員長の任を仰せつかりました。遠山文吉前期編集委員長のもとで検討してまいりましたさまざまな課題を引き継ぎながら、会員の研究発表、研究交流の場として意義ある学会誌となるよう、編集委員一同、力を尽くしてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

以下に何点かお知らせいたします。

・投稿論文の取り扱いについて

編集委員会は、学会誌の刊行の時期に合わせて1年に4回、5月、7月、10月、2月に開催しています。およその編集の流れは以下の通りです。投稿論文受領 一番早い編集委員会で担当委員、査読者を決定 査読結果を受けて次の編集委員会で検討し、掲載可とするもの、再査読を必要とするもの、掲載

を見送るものなど、取り扱いを決定する。この間、メール等の通信手段を駆使して少しでも迅速に編集業務を進めるよう努力していますが、現在のところ、投稿をいただいてから結果をお知らせするまでに数ヶ月を要しています。この点につき、ご理解をいただきますようよろしくお願いいたします。

・学会誌のレイアウトについて

現行の投稿規定では、「原稿は、A4版横書き、1枚あたり46字×35行とする。

(23字×35行の2段組で投稿してもよい。)としています。これをふまえて、31-1号より学会誌の「研究論文」「研究報告」等について、23字×35行の2段組のレイアウトで印刷することといたしました。左右の余白が従来より若干狭くなりますが、ご了承ください。

・日本語要旨について
前期の編集委員会で、「研究論文」「研究報告」については、本文のタイトル、記名に続けて、日本語要旨を横1段組で掲載することを決めました。現在、これに基づき編集作業上の問題を検討している

ところでは、投稿いただく際には、日本語要旨も誌上に掲載されることをお含みおきの上、日本語要旨の字数(400字程度)、内容等について、ご留意いただくようお願いいたします。

訂正

4 ペ - ジ パネル・ディスカッションのパネリスト：入里叶男(裏添私立仲西小学校は(浦添市立仲西小学校)の誤りでした。

& ewqftwqs|thfs evsfs|fhlnbvxs fhqw

4. 第32回(沖縄)大会パネル・ディスカッションの企画について

日本音楽教育学会沖縄大会実行委員会



パネル・ディスカッション

『地域性を生かした音楽教育を考える』

～オキナワの肝心(チムグクル)～

パネリスト

入里 叶男(沖縄県浦添市立仲西小学校教諭)

前原 信喜(那覇市立中央公民館館長)

中江 裕司(映画監督)

司 会 吉田 孝(国立教育政策研究所)

本土復帰ののち30年を経て、さまざまな“本土

化”の波を経験した沖縄は、それにともなって今日地域社会の産業経済や教育の構造が大きく変わり始めようとしています。たとえば、大型リゾート施設の飛躍的な増加と観光産業の隆盛、優に県民人口の4倍を超える観光客の流入。各種コールセンターの誘致にともなう情報化社会への変身実験。また、本島各地にある城(グスク)遺跡の世界遺産指定とサミットに象徴される国際行事へのひきもきらない誘致熱、“インターナショナル化”への熱がまだ冷めやしません。

好むと好まざるとにかかわらず、グローバリゼーションという新しい時代の波にさらされている、というよりその最前線にいつのまにか押し出されてしまったというのが、おおかたのウチナーンチュ（沖縄人）たちの偽らざる実感ではないでしょうか。

しかし、つい最近までの沖縄は、このグローバリゼーションとは対極にあったところです。北は沖縄本島から南は八重山諸島まで点在する多くの島々で、シマ（共同体）固有の言語と年中行事、あるいは生産を礎に、それぞれの地域社会固有の文化を育んできたからです。したがって、沖縄の人たちはオキナワと括る前に、それぞれのシマンチュ（共同体の成員）としてのアイデンティティを強く自覚し、その言語・風習・生活感、つまり地域と歴史の共有感覚のゆえにこそ、互いが兄弟として助け合う人間関係“結ユイ”の心根をもちつづけてきたのです。その精神（チムグクル）を直に表現し、強化するメカニズムが音楽を中心としたさまざまな芸能です。それらはもっぱら日常生活のさまざまなシーンと地域行事の場をとおして熟成され、継承されてきたものですから、地域の教育力を主要な回路として沖縄の芸能は受け継がれてきたのです。

さて、揺れる現代の沖縄にあってなおゲンキな三人をパネリストとしてお招きすることにしました。

入里叶男（いりさと かなお）さんは、民族芸能の宝庫ともいわれる八重山・竹富島のご出身です。おそらく、子ども時代に仕込んだ芸能家（ゲームチャー）の血がうずくのでしょう、学校音楽でも、郷土芸能や自作のオキナワ教材を盛んに用いて、いつのまにか子どもたちといっしょになって音楽と身体の“シマまつり”を展開するというアシビ（遊び）授業の名人です。

前原信喜（まえはら しんき）さんは、琉球王府の宮廷芸能・古典音楽の師範の資格をもつ現役の実演家ですが、PTA 活動や、公民館を足場に地域の子もたちとカンカラ三線を普及させた方で、またご自身地謡として、あるいはマネージャーとして沖縄芸能の海外公演を数々成功させてきたマルチ人間でもあります。

中江裕司（なかえ ゆうじ）さんは、三人のなかで唯一のヤマトンチュ。大学時代から沖縄に住み着き、オキナワン・カルチャーショックをバネにユニークなオキナワ映画を制作してきた映像作家です。その作風は、実に多様なウチナーンチュたちの屈託のない表情を、島の風土に根ざして映し出すものであり、とくに近作の「ナビィの恋」では、その後 NHK 朝ドラで活躍の平良トミさんを主人公に起用して話題を呼びました。

それぞれのフットワークで、オキナワをたっぴり生きてきた三人の強者が、映像を交え、実演を交え展開するパネル・ディスカッションをご期待ください。

（文責 実行委員 中村 透）

5. “ ISME at Risk ” — 改革の破局と危機からの脱出に向けて

ISME 理事 村尾忠廣



(8 分音符と地球をデザインした伝統的な ISME のロゴマークも
上記のような新しいデザインに取り換えられた。)

【ユトレヒト移転の失敗】

ISME は、結局 <破局の危機> に陥ってしまった。学会誌 30-2 号で筆者が報告した「改革が改悪か — ISME Strategic Plan 2000-2002」を参照してほしい。

ISME は、英国レディング大学の好意、援助によって本部事務局をこの大学に置いていた。しかし、オランダ政府の基金が得られるという理由で、強引にレディング大学との契約を打ち切り、ユトレヒトに本部事務局を移転したのである。

その後の事態は我々（日本、アメリカ、オーストラリア）が懸念したとおりになった。オランダ政府からの基金は得られず、あわてて申請した他の基金もことごとく失敗した。すでに有給の専従事務職員を 2 名採用し、2 年間の契約も結んでいたため、職員給与、事務所の賃貸料などを含めた経費が雪だるま式に膨れ上がっているのである。

【メンバーシップ改革の失敗】

ISME の会員も増えるはずが、逆に激減した。これまで 2 年間のメンバーシップであったものを 1 年に変えてしまったからである。毎年更新となれば、ISME 国際大会の開催されない年には会員が激減する - - そのくらいのことは日本の会員事情を考慮しても当然予想できる。エドモントンの総会では、イタリアの代表(J. Tafri)が、イタリアの会員数は ISME の大会のある年とない年でシーソーのようになってしまおうとまで述べた。が、会長の J. Drummond は、だからこそ奇数年に ISME Regional Conference を開催するのだ、と胸をはり、地元ニュージーランドで開催される第 1 回大会の大宣伝をしたのである。しかし、ISME の名前を付したとはいえ、国内大会を拡大し、「ISME 地域大会」として読み替えたような

ものであった。だから、隣国オーストラリアでさえ著名な研究者は参加しなかった。つまり、ISME 地域大会は ISME の会員拡大にまったく貢献しなかった、ということになる。5 月の会長報告では、ISME の会員登録を更新した人数は昨年より半分以上となった。我々からすれば当然の結果であるが、エドモントン大会で示された来年度予算では、2000 年より 2001 年に会員数が増え、収入も増えるの見積もっていたのである。あまりに無謀、ばかげている - - エドモントンの国別 ISME 支部総会では日本人参会者の全員が口を揃えてそう言った。そしてそれは現実になってしまったのである。

【ベルゲン理事会における逆転劇】

J. Drummond 会長からの 5 月レポートは改革の失敗に対する責任についてはいっさいふれず、逆に、理事各位に対して赤字対策をどうするか、6 月理事会までに案を出せというものであった。当然、理事は怒ってよいはずだ。しかし、一連の ISME 改革（改悪？）に対しては、日本とオーストラリアだけが反対して他は賛成したのだから、怒るわけにもゆかないのだろう。（アメリカは前理事の Wendy Sims が理事会で強く反対していたものの、後任の C. Lindeman は総会においてかなり賛成票を投じていた。）そうなると今回の改革に一貫して反対してきた日本こそ怒りをぶつけるべきだろう。が、私の会話力では口論になると英語を母語とする連中に太刀打ちできない。それで、ISME 理事、事務局にメールで論陣を張ることにした。内容は 1) なぜ、日本が一貫して反対してきたか、2) 財政が破綻した以上、即刻 ISME 事務局をユトレヒトから撤退し、3) 会長が平謝りしてイギリスのレディング大学に事務所をもどすか、新たにアメリカ、もしくはオ

ーストラリアの大学でレディング大学のような契約を示すところを確保する、4)有給の事務局長、職員を置けない以上、財務担当理事を復活させるべき、5)赤字は前理事、現理事で負担する、というものであった。第5)の内容は無反応な理事を刺激するための戦略である。メールの原稿は前財務担当理事、Gary McPherson に2度にわたってチェックを受けた。あえて、ここで彼の名前だしたのは今回の改革にもっとも強く反対していたのが財務担当の Gary であったからである。にもかかわらず、多数決のルールにしたがいエドモントン総会では、彼のもっとも反対する内容を予算として提出し、財務担当理事の職を廃し、辞職せざるをえなかったからである。彼の名誉のためにもこうした事実関係は知られてしかるべきだろう。

送信ボタンを押す時はさすがに手が震えた。ベルゲンの理事会へ立つときも、足取りが重苦しく、実に嫌な気分であった。が、理事会が始まると、様相は一変した。議論はメール提案どおりに進行したのである。会長の J. Drummond はユトレヒト残留を示唆した。前会長の Einar Solbu が赤字を補てんするだけの基金を獲得したから、という理由からである。が、これにはほとんどの理事が反対した。第一、Einar の獲得した基金(アフリカの教育振興のための助成金らしいのだが)を ISME の赤字補てんにうめられるのかどうか、という問題があったし、再来年どうなるかもわからない。結局、ユトレヒト事務局の移転が決まった。次の問題はどこに移すか、とうこと。さすがに、レディング大学へ戻せ、という意見はなかった。会長の Drummond は自分の所属するニュージーランドを提案した。しかし、休憩の合間に日、英、米、豪、独、ブラジルの理事連合(?)が結成され、西オーストラリア大学のキャラウェイセンター(CIRCME)に本部を置き、事務局長にはJ女史を推すという案がまとまった。Sir. F. Callaway と Callaway Centre が ISME に貢献してきた歴史を考えれば、ISME 本部が里帰りしたかのような感じさえする。事務局の移転先としてこれは理想的と言ってよい。J女史にしても ISME と Callaway Centre の両方に関わってきた人物である。

J. Therens はシャープで聡明な事務局長であったが、私の知る J女史は対照的にフラットでお母さんのような包容力がある。私達の案は圧倒的多数で可決された。

早速、Callaway Centre とJ女史に連絡をとり、承諾もえた。理事会を終え、帰国後会長の Drummond は、理事会での議論を踏まえ Gary McPherson と J女史と連絡をとりはじめた。これで、すべてうまくゆくはずだった。が、Callaway Centre はビルの改築などの問題があり、J女史も現在は Callaway Centre の職を離れていることが判明。8月13日の時点でまだ最終決定にいたっていない。しかし、ユトレヒト事務局は9月にはオーストラリアにすべての ISME 資材を船積みして送ることになっている。12月には荷物が届き、税務上の手続きを済ませて新事務局がスタートしなければならない。オーストラリア本部事務局ということ事態はもはや避けられないだろう。レディング大学からユトレヒトへの移転さえまだ完全には終わっていなかったのに。オランダを9月に出港する ISME 事務局は、もしかしたら「さまよえるオランダ船 ISME」である。いったい E. Solbu - J. Drummond 体制のもとに推し進められた ISME の改革とは何だったのだろう。

我々にとっての救いは三好前理事が一貫してこの改革に反対してくれたことである。エドモントンの総会で、反対票ばかりを投じる日本はめだったし、肩身がせまかった。しかし、そのおかげで今、日本の発言には重みがある。Solbu も Drummond も ISME を強化しようとして、理想に燃え、改革を断行したのであり、自らの権力とか名誉のためにおこなったのではさらさらしない。しかし、リーダーとしてあまりに見通しが甘く、結果的に ISME 50年の伝統を著しく傷つけてしまったことになる。

折しも、日本音楽教育学会の会長選挙の結果が報告されたが、リーダーとしての責任に身の引き締まる思いである。

6. 新刊紹介(洋書)

David Hargreaves & Adrian Noarh (2001) (eds)

Musical Development and Learning: International Perspective. Continuum, London and New York

タイトルは「音楽の発達と学習 — その国際的展望」となっているが、実際には世界の音楽教育の実情を紹介したものである。編者の一人, David Hargreaves は音楽の発達・社会心理学の著名な研究者であり, その彼の友人, 知人が中心となって本書が執筆されている。したがって, 執筆者に偏りが見られるものの, その偏りによって「発達と学習」という共通の視点を得ている。「世界の音楽教育事情」という内容の本は, とかく通り一遍のものに陥りやすい。それだけに, 本書の<偏り>は一つの大きな魅力と言ってよい。日本の項目は村尾忠廣と彼の指導学生 (University of Surrey Roehampton) の B. Wilkins が共同執筆している。(村尾)

London: Routledge

英国のオープン・ユニバーシティ、PGCE コースのテキストとして、学術雑誌の重要論文などがコンパクトに編纂されている。英国における音楽教育の展開や、基礎研究、個別的テーマ、さらには教室における音楽指導を、理論と実践の双方の視点から取り上げている。入門者が音楽教育研究を鳥瞰するのにふさわしい書。(小泉)

Sefton-Green, Julian and Sinker, Rebecca (2000)(eds.)

Evaluating Creativity: Making and Learning by Young People, London: Routledge

「創造性の評価」という、日本においても取り組まなくてはならない重要テーマを直視した書。メディア教育関係者の必読書であるが、メディアアートと関連の深い音楽についても、Lucy Green が洞察に富む一章を寄せている。(小泉)

Richards, Chris (1998) *Teen Spirits: Music and Identity in Media Education,*

London: UCL Press

本書も、メディア教育研究者によるものである。英国では近年、メディア教育と音楽教育の交流が試みられており、音楽教育研究者がメディア教育研究のアウトプットから得るものも大きい。本書はエスノグラフィーの手法をとり、教室におけるポピュラー音楽の学習というコンテクストの中で、生徒のアイデンティティを、階級・ジェンダー・エスニシティという切り口から考察している。(小泉)

4. Green, Lucy (2001 秋刊行予定)

How Popular Musicians Learn: A Way Ahead for Music Education,

Aldershot: Ashgate

イングランド在住の 15 歳から 50 歳までのミュージシャンにインタビューを行い、彼/彼女たちがどのようにポピュラー音楽の知識や技術を学習してきたかを分析した書。英国の GCSE やナショナル・カリキュラムにポピュラー音楽が導入される以前に、学校で音楽教育を受けた者は独学で、導入以降は学校内外の双方においてポピュラー音楽を学んでいることがわかった。また、ポピュラー音楽は仲間文化を中心に学習されていくこと、ポピュラー音楽の演奏家は、クラシック音楽など他の様式の音楽に対しても耳が開かれていることなどを明らかにした。音楽教育実践にも即座に生かす内容となっている。(小泉)

Stephanie Pitts (2000)

A Century of Change in Music Education: Historical Perspectives on Contemporary Practice in British Secondary School Music. Aldershot, UK: Ashgate

この本は、1900年代から現代までの英国の、特に中等教育を中心にした音楽教育史をクロノロジカルに詳述したものである。英国の音楽教育史について、体系的に書かれた本は、希少であり、しかもナショナル・カリキュラム（英国の国定カリキュラム）が出されて以降の教育現場の動向までを対象とし、今後の英国中等教育を展望したものはこの本だけである。また、Paynterなどによる作曲家・教師の実践の実践を、公文書や文献はもちろんのこと、インタビューなども盛り込むことで、当時の理論及び実践的動向をつかむことができる。同時に、Paynterらによる Creative

Music の実践上の混乱や、Paynter らに対する批判の文献もサーベイしており、音楽教育史研究者のみならず、さまざまな方面に研究者（特に英国の音楽教育に関心のある者や音楽づくりに関心のある者など）には、有益であろう。

（高須）

Louis Cohen, Lawrence Manion, Keith Morrison (2000)

Research Methods in Education (5th edition). London: Routledge Falmer.

この本は、特に音楽教育研究を対象としていないが、教育研究を行う者にとって必要な研究の初歩から、具体的な研究メソッドについて書かれている。初版は1980年であるが、第5版は、第4版と比べてもかなり追記され、改訂されている。研究の立案の仕方から、メソドロジーとメソッドの違い、信頼性と妥当性の問題といった基本的なことから、質的研究（例えば、ケーススタディの方法、観察法、エスノグラフィーの方法論など）や量的研究（実験研究の手続き、アンケート調査法、多変量解析など）の双方の代表的なメソッドについても詳述されている。（高須）

Norman K. Denzin, Yvonna S. Lincoln (2000)

Handbook of Qualitative Research (2nd edition) Thousand Oak: Sage Publication.

英米では、質的研究者にとって必読のハンドブックである。初版は、1994年であるが、第2版で内容が刷新された。ナラティブ・アプローチ（物語的研究法）やグラウンディッド・セオリーなど、質的研究の詳細な手法について数多く取り上げている。また、質的研究のあり方や、今後の展望などについても書かれており、質的研究者にとって有益な本である。（高須）

Keith Swanwick (1999)

Teaching Music. Muically. London: Routledge.

この本は、英国の音楽教育研究者 Keith Swanwick が、自己のこれまでの研究を集大成し、さらに発展させたものである。彼の従来の著書とは若干異なり、特に教育現場の教師にわかりやすく書いたものとして評価できる。章としては、「音楽的価値」「文化としての音楽」「音楽教育の原理」「音楽的な評価の意義と方法」「音楽教育の展望」等である。（高須）

Campbell, Patricia S. (1998). *Songs in their heads: music and its meaning in children's lives*.

Oxford: Oxford University Press.

子どもの視点からみた音楽についてのエスノグラフィー的研究。学校や幼稚園を訪問し、音楽の授業だけではなく、遊び時間やランチタイムで耳にした子どもの歌や遊びと、それらを取り巻く環境に注目し、観察、フィールドノート、インタビューなどを元に、子どもにとっての音楽について語っている。子どもとの会話や実際の事例記述が多いので非常に読みやすい。幼児～児童期の発達研究者にとっては必読書かも。（安達真由美）

Kwang, Ng A. (2001). *Why Asians are less creative than Westemers.*

Singapore: Prentice Hall.

これは「音楽」というよりも、「創造性一般」について社会心理学的見地から、アジアと西洋との文化・社会的価値観の違いがどのように個人の創造性に影響を与えているか（与え得るか）について書いている。参考・引用文献リストもついているが、学術書というよりは一般書か学部レベルの入門書のような感じで、読みやすい。（安達真由美）

7. 会員住所・所属変更・新入会員（2000年版No.3）

（PDF 版では省略します）

